『週刊ポスト』2019.4.8(月)発売号

名曲カルテ

昭和歌謡といつまでも

堀井六郎
絵・松本 浦

第74回 「佐川ミツオ」のスマートでハイカラなアイドル時代

黒澤明監督の名作『生きる』の中で志村喬によって歌われた『ゴンドラの唄』は、今から1世紀以上前の大正4年に松井須磨子が芸術座公演で初披露した劇中歌でした。

このワルツ調の名曲を、半世紀ほど前に3連12ビートのロッカバラード風のスタイルで歌って、リバイバルヒットさせた若手歌手がいました。佐川ミツオ（現・満男）です。傘寿を迎える今年、金語楼のような親しみやすい風貌になってしまった佐川ですが、昭和35年7月、21歳でデビューした当時は颯爽としていて、同じビクター所属で同じ日に17歳でデビューした橋幸夫よりも、私にはずっとスマートに見えたものでした。

デビュー曲は股旅物でもムード歌謡でもなく、ニール・セダカから提供された『二人の並木径』というアメリカンポップスでした。

前奏なしでいきなり英語で歌が始まります。途中で日本語が挿入され、再び英語で終わるという構成は、欧米ポップスの日本語カバーの常道でもありますが、佐川の素直な声質にマッチした曲自体の良さに加え、当時としてはかなりハイカラに仕上がっていて、ロカビリー出身の佐川を人気者に押し上げました。

翌36年に発売された佐川の『ゴンドラの唄』には、黒澤や志村もさぞかし驚いたことでしょう。前奏はスチールギターがハワイアンを思わせるゆったりとした短い旋律を奏でるのですが、実はこの旋律、昭和34年に全米1位を獲得した名曲『スリープ・ウォーク』というギター・インストゥルメンタルのイントロ部分をそのまま借用していたのです。見事な換骨奪胎です。

間奏にはバリトンサックスが響き、ロッカバラードと演歌が融合したようなムードの中、若き佐川は情感を込めて歌っています。

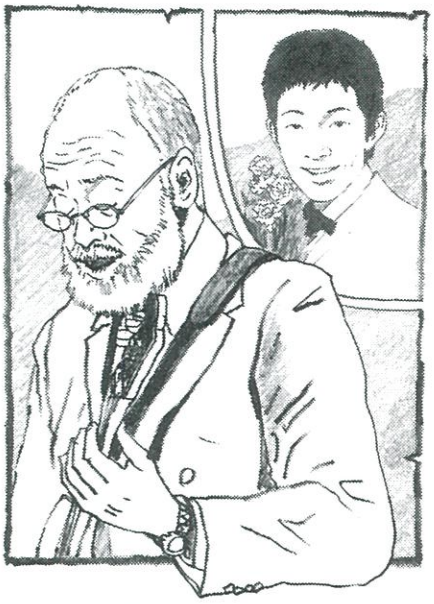
佐川はデビューの年にすでに昭和10年の名曲『無情の夢』をドドンパのリズムに乗せて歌い、長期間ヒットさせていました。

佐川がデビューした時期にコロムビアから発売された井上ひろしの『雨に咲く花』（昭和10年作品）が大ヒットしたことで、ビクター側がリバイバル歌手として対抗指名したのが、井上と同じロカビリー出身の佐川でした。

佐川の『無情の夢』と『ゴンドラの唄』で味を占めたビクターは、昭和36年7月にフランク永井に『君恋し』を歌わせ、この年のレコード大賞を獲得することになります。

佐川のアイドル時代は1年半ほどの期間だったでしょうか。しかし、アレンジの妙で名曲を復活させたジャズ畑出身の編曲家・寺岡真三とともに、『君恋し』への道筋をつけた佐川の存在を忘れてはいけないでしょう。

デビュー曲だった『二人の並木径』は、実の娘である歌手の宙美が今から12年前の平成19年にデビュー・シングルのカップリング曲として発表、その昔、ニール・セダカをカバーしていた頃の伊東ゆかりを彷彿させてくれます。



ほりい・ろくろう　昭和27年東京都生まれ。慶應義塾大学文学部卒業後は25年にわたる出版社勤務を経て独立。現在は出版社経営の他、ライターとしても活躍。『私的「昭和大衆歌謡考」』第4集『しあわせになろうね』（グスコー出版）が好評発売中